●せいてん質問箱

念珠を爪繰る行為には、どういう意味があるのですか？

●質問●『季刊せいてん』第五十三号の入門講座に掲載された法然上人の絵像（本誌53号、九頁）をみますと、念珠を両手で爪繰っておられます。

この行為は、宗教上どのような意味があるのでしょうか。

ご指摘の法然上人の絵像を拝見しますと、多くの珠を連ねた念珠を右手でささえ、左手の指先で珠を一つひとつ爪繰っておられる上人の様子がうかがえます。これは、口にお念仏を称えながら、指でその数を数えている姿を表したものと思われます。

このように、念珠は、数珠あるいは珠数ともいうように、本来、称名や陀羅尼、唱誦などの回数を数えるためのものであったのです。

浄土宗では、現在二十七顆と四十顆、あるいは二十顆の二連の念珠を組み合せた日課念珠といわれるものが使われています。これは、陰陽師であった阿波の介という人が、法然上人の門下に帰入するにあたって、念仏の数を掛算するのに便利なように創案したものと伝えられ、上人は阿波の介の用意が周到であることを特に賞讃されたといいます。

『和語灯録』巻五（『真宗聖教全書』第四巻、六八一頁）には、

源空は、大唐の善導和尚のおしへにしたがひ、本朝の恵心（源信のこと）の先徳のすすめにまかせて、称名念仏のつとめ、長日六万遍也。死期やうやくちかづくによて、又一万遍をくわえて、長日七万遍の行者なりと

とあり、法然上人は、善導大師や源信和尚の指南によって、六万遍の称名念仏を日課とされ、晩年には七万遍に達したことが記されています。

しかし同じく『和語灯録』巻二（同、五九五頁）には、一声の念仏の功徳と、十声の念仏の功徳の勝劣を論ずる中で、

法蔵比丘、われほとけになりたらん時、十方の衆生、極楽にむまれんとおもひて、南無阿弥陀仏と、もしは十声、もしは一声申さん衆生をむかへずば、ほとけにならじとちかひ給ふ。かるがゆへにかずの多少を論ぜず、往生の得分はおなじき也。本願の文顕然なりと言われていることからも分るように、決して念仏の数量を問題にしていたわけではありません。

浄土真宗においても、親鸞聖人や蓮如上人など歴代の宗主の絵像をみると、法然上人と同様、右手で念珠をささえ、左手の指先で珠を爪繰る姿が多く描かれています。しかしこれも決して念仏の数を数えているのではありません。大谷派の恵空師は、『実悟記』の、

実如上人被仰しは、珠数はただもたぬ物也、くるべし、蓮如上人も御持候ては御くり候しぞかしと、勤座敷にても仰事候し

（『真宗聖教全書』第三巻、九〇一頁）

という文をうけて、その書『叢林集』に、

かの記にもまはすくると云て数を取れとは不レ云、初より珠数は往生の用に非ずといえども仏家の通儀なれば持レ之

と述べています。つまりこうした絵像のお姿は、仏教一般の儀式に倣ったものにすぎないといっています。

浄土真宗では、念仏は信心相続の相であり、称える側からいえば報恩感謝の念仏です。念珠はその際に法具として用いるのです。決して自分の功徳を積み上げるために称えるのではありません。蓮如上人は「御文章」（二帖目五通）の中に、

そもそも、この三四年のあひだにおいて、当山の念仏者の風情をみおよぶに、まことにもつて他力の安心決定せしめたる分なし。そのゆゑは、珠数の一連をもつひとなし。さるほどに仏をば手づかみにこそせられたり。聖人（親鸞）、まつたく「珠数をすてて仏を拝め」と仰せられたることなし　（一一一六頁）

と記されています。この一通は、文明三年に吉崎に移られて三、四年を経過する中で、周囲の人びとのようすを目の当りにして、僧侶も門信徒も仏を敬う作法に欠け、とても念仏者のふるまいとは見えないことを嘆かれ、注意を促しておられるものです。この「御文章」の中で蓮如上人は、念珠を持たなくても、それが往生浄土のためには何の支障にもならないこと、大切なことは他力の信心ひとつであるともおっしゃっています。しかしながら真実信心をいただいた念仏者は、それが必ず口にも姿にもあらわれるものだともおっしゃっているのです。念仏者の法を聞く自然な姿として、念珠は欠くことのできない法具ということができるでしょう。

（龍谷大学講師　普賢保之）